

標準ディサースリア検査 (Assessment of Motor Speech for Dysarthria; AMSD) の臨床的応用

イムス札幌内科リハビリテーション病院 リハビリテーション科
中西俊二

標準ディサースリア検査 (Assessment of Motor Speech for Dysarthria; AMSD) は西尾によって2004年に開発された、国内唯一の標準化された、成人対象のディサースリア検査である。AMSDは1994年に出版された「旭式発話メカニズム検査」(Asahi Speech Mechanism Test; ASMT)の改訂版として作成された。ASMTが発声発語器官の検査であったのに比べ、AMSDは一般情報の収集、発話の検査、発声発語器官検査から構成された、総合的なディサースリア検査である。本セミナーではディサースリアの評価における3つの過程「情報を収集する過程」「情報の統合・分析・解釈の過程」「臨床方針を決定する過程」に検査としてのAMSDをどのように応用できるかを紹介していきたい。「情報を収集する過程」における検査は情報を収集する道具と考えることができる。その点でAMSDは評価基準や実施方法が規格化され、実施に要する時間は概ね40分程度であり、臨床方針の決定に効率的に導くための精度と実用性が保たれた標準検査であると考えられる。AMSDは検査に習熟すること、結果をまとめることに多大な労力や時間を要する検査ではないが、発話の検査や発声発語器官検査における評価基準を適切に理解しておく必要がある。ディサースリア臨床研究会が2004年より各地で開催し

ている。検査方法の習得を目的とした「標準ディサースリア検査講習会」においても、受講者より「評価基準を把握することが難しい」という意見を多く聞く。セミナーでは「情報を収集する過程」のポイントとして、発話の検査や発声発語器官検査について理解しておくべきポイントを解説していきたいと考える。さらに「情報の統合・分析・解釈の過程」「臨床方針を決定する過程」へのAMSDの応用として、今日医療の領域で国際的に標準的に用いられている問題志向型診療記録 (problem-oriented medical record; POMR) に基づいた結果のまとめ方に従い、問題点を取りこぼしなく明確に把握し、適切に治療プランを立案すること。国際生活機能分類 (ICF) に準じて、障害モデルを用いることにより、多角的、統合的に障害を把握し介入することについて、事例を用いて述べていきたいと考える。

■略歴

平成13年 札幌医療科学専門学校言語聴覚士科卒業
平成13年～平成26年 鶴巻温泉病院リハビリテーション部勤務
平成27年～ イムス札幌内科リハビリテーション病院リハビリテーション科勤務